



- 特集 生薬いろいろ、人生いろいろ 2
- 研究員のしごと 中央博物館周辺の人為的な地形変化 4
- 展示づくりの裏側 「式年神幸祭記念 香取神宮展」
～展示の裏側ちょっとお見せします～ 6
- 博物館資料の紹介 赤絲威大鎧（複製） 7
- 活動紹介 中央博物館のSNS情報発信 8

特集

生薬いろいろ、人生いろいろ

展示課 丸山 啓志

はじめに

みなさん、「生薬」^{しょうやく}という言葉を聞いたことがありますか。

中央博物館では、大多喜町にあった旧千葉県薬草園から受け入れた生薬標本コレクションを中心に、企画展「生薬～自然からの恵み～」を開催します。

漢方薬と生薬

「漢方薬」や「生薬」と聞くと、どのようなイメージが浮かぶでしょうか。風邪の季節に活躍する漢方薬は葛根湯ですが、葛根（クズの根）などその原料となるものが生薬です。昔、中国から日本へ伝わった中医学（中国医学）を基に、日本で独自に発展した医学が「漢方医学」です。この呼び方は、江戸時代に日本に入ってきた西洋医学（蘭方）との対比で生まれました。蘭方が病気の原因である細菌やウイルス、病巣に的を絞り、それを取り除くことを重視するのに対し、漢方は体の活力を増し、健康体

として調和が取れた状態にすることを目指します。

漢方薬の名前が「～湯」、「～散」、「～丸」で終わるのは、元の薬の作り方を示しています。多いのは「～湯」で、生薬を煎じて飲む薬です。「～散」は散剤の意味で、生薬を細かく刻んで粉末状にしたもので、生薬を刻む道具の一つが薬研です（図1）。時代劇でよく、お医者さんがゴリゴリ薬研を使っていますね。「～丸」は散剤を蜂蜜などで固めて丸めた丸薬です。ただ、現在はこの3つの形ではなく、エキスを粉末化したエキス製剤が一般的です。

生薬には植物由来、動物由来、鉱物由来のものがあります。植物が最も多く、植物体全体を使うこともありますですが、普通は根や根茎、果実や種子、葉、花、樹皮や根皮など部位に分けて使います。樹脂や虫こぶも使います。靈芝^{れいし}（図2）はマンネンタケというきのこですが、そのような菌類由来の生薬もあります。動物由来の生薬は、ウシの胆のうの中に生じた結石（牛黃）、タツノオトシゴの乾燥品（海馬）



図1 薬研



図2 精芝 マンネンタケの乾燥品

(図3)、カキの殻 (牡蠣) など多様です。鉱物は石膏や朱砂 (図4) などがあります。

毒性が強い生薬もあります。例えばミステリーで登場するトリカブト。これは塊根が附子や烏頭と呼ばれ、加工したものと乾燥しただけのもの、両方が生薬として使用されます (図5)。

大変だった生薬リストの解読

「貝母」はなんと読むでしょう。正解は、「ばいも」です。読み方の難しい漢字が多いのは、生薬が中医学で命名されているからです。普段と異なる読み方 (例: 生姜は通常「しょうが」ですが、生薬では「しょうきょう」)、常用漢字ないもの (例: 草薢「ひかい」、オニドコロという植物の根茎)、漢字から資料をイメージしづらいものなどがあります。

旧千葉県薬草園で作られた生薬標本コレクションのリストに書かれていたのは、大まかな区分 (植物の部位、動物性、鉱物性) と生薬名 (漢字)、保存形態 (瓶の大きさなど) だけでした。これでは情報が足りません。生薬名の読み、基原 (生薬の基になったもの)、科名などを展示に向けて明らかにする必要がありました。

生薬をよく知っているのは、薬剤師です。薬剤師国家試験にも生薬は登場します。

中央博物館では、私は古生物 (特に脊椎動物化石) や博物館学を担当していますが、実は、岐阜薬科大学を卒業した薬剤師でもあります。

人生どう転ぶかわかりませんが、20年近く前の知識を呼び覚ましながら、普段使用しない生薬図鑑をかたわらに、漢字や生薬の基原、薬効について、570点近くの確認を進めました。3ヶ月程度かかりましたが、なんとか全リストを解読できました。



図3 海馬 タツノオトシゴの仲間の乾燥品



図4 朱砂 辰砂とも呼ばれる硫化水銀のかたまり



図5 塩附子 トリカブトの塊根を塩漬けし、乾燥した加工品

おわりに

この企画展の開催には薬剤師である私と、植物、菌類、動物、鉱物のスペシャリストが必要でした。生薬の歴史や私たちの生活との関わりをご紹介するためには、歴史学・民俗学など人文科学分野の視点も欠かせませんでした。中央博物館の総力を結集した展示をぜひ、お楽しみください。

研究員のしごと

中央博物館周辺の人為的な地形変化

地学研究グループ 山中 莢

地形は、不变のものではなく、長い時間スケールでは様々な作用により変化してきました。その形には、気候変動など、形成過程で生じた様々な出来事の痕跡が刻まれ、貴重な自然の遺産と言えます。しかし、一般に地形は保護対象とはみなされず、特に高度経済成長期以降、住宅・工場団地、ゴルフ場、空港等の開発のため、各地で大規模な地形改変が行われました。ひとたび自然の地形が失われると、後世にその土地の成り立ちを詳しく調べることは難しくなります。そのため、改変が少ない時代の地形の記録は、土地の歴史や人間活動の影響を知る上で貴

重な資料となります。

中央博物館がある青葉の森公園の周辺も、元は下総台地とそれを樹枝状に刻む谷が織りなす地形環境でしたが、公園建設期（昭和末～平成初頭）に変貌を遂げています（図1）。かつては、農林水産省畜産試験場を中心に牧草地・農林地が広がり、1980年代半ばまで地形がほぼ自然のまま残されていました。その後、畜産試験場移転を契機に、公園・住宅地への転換に向けた土地造成が行われ、今日の地形となっています。公園の一部に自然の地形が残ることから、どこがどの程度変化したのか詳細に地図にし

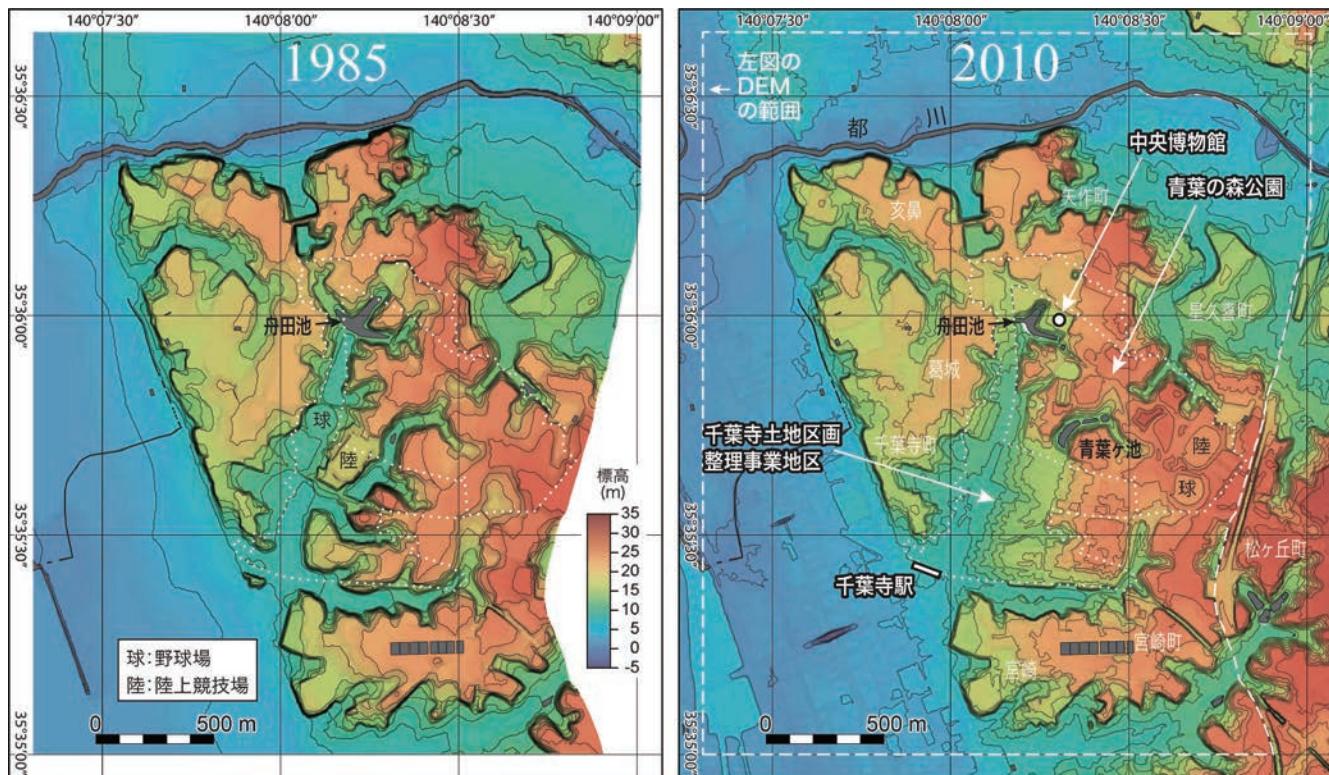


図1 青葉の森公園建設前（左：1985年）と建設後（右：2010年）の地形。等高線間隔は2m。2010年の地形は国土地理院5mDEMを使用。山中・高橋（2025）、千葉県立中央博物館研究報告、第17巻2号。

たいと考えました。

ある地域の地形変化の程度を知るには、変化前後の標高を比較してその差を求める手法が有効です。公園建設後の地形は、国土地理院によって5mメッシュの詳細な標高データが整備されています。それ以前については、何らかの資料をもとに地形を復元する必要があります。そこで、1万分の1地形図（国土地理院1985年測量、1986年発行）の詳細な等高線から、GISを使用してこれをなぞり、面的なデータに変換しました。以上により、公園建設前後（1985年と2010年）の標高データを準備しました（図1）。比較すると、2010年には公園の南で自然の地形が消滅し、大規模な緩傾斜地が出現していることが目立ちます。

2時期の標高データを使い、2010年と1985年の標高差を求め、標高が増加したメッシュを赤、減少

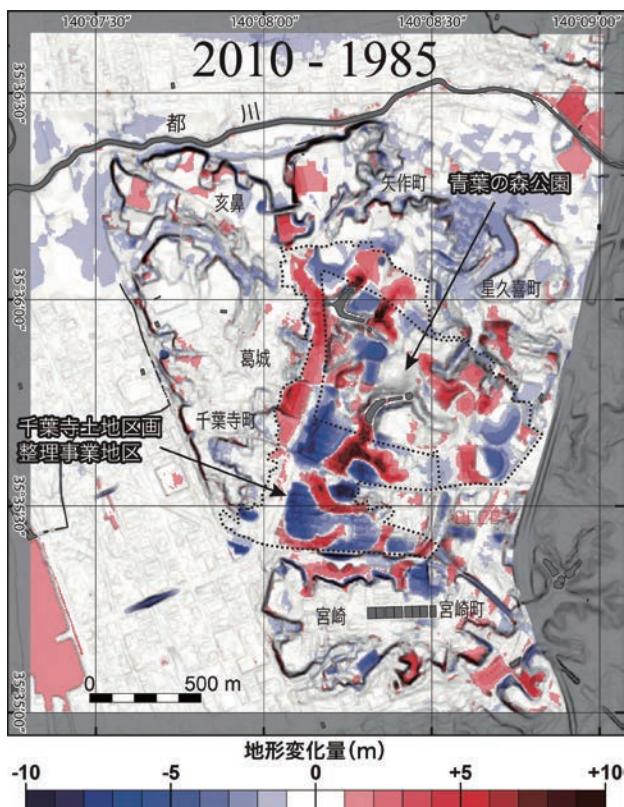


図2 1985年～2010年の地形変化量の分布

したメッシュを青とし、変化量が大きいメッシュほど濃い色となるように塗り分けます（図2）。その結果、青葉の森公園内と、その周囲の宅地開発区（千葉寺土地区画整理事業地区）内に変化量±5m超の大規模な地形変化が集中することが示されました。大局的に、かつて台地があった場所で標高が減少し、谷があった場所で標高が増加する傾向が認められます。公園と土地区画整理事業地区を合わせた範囲の土砂増減量を算出すると、増加量は117万m³、減少量は116万m³とほぼ同量であり、台地を削った土砂が直接谷埋めに使用されたことを示唆します。117万m³をこの範囲の土砂移動量とすると、これはマリ��スタジアム1.1杯分にあたります。

中央博物館周辺に限らず、全国で地形の改変が続いている。本稿で使用した標高データのように、改変前の地形の記録は、後世の自然誌研究等で大いに活用されると期待されます。そして、その記録は地形の実体に近いほど将来の活用の可能性も広がります。しかし、野外の地形そのものは、実物資料として博物館で収集・保管するには向きません。地形のように広域的かつ立体的な対象では、今後、資料がデジタルデータとしてのみ存在する場合も増えていくと予想されます。近年、古い空中写真から過去の地形を3Dモデルとして復元する技術が発達し、PC上でこれを行えるようになりました。レーザ測量による地形計測も低価格化してきており、現在は、技術革新により新しい形で三次元的な資料を残せるようになった時代と言えます。最近は、失われた地形をどのように復元して収集し、使いやすい形で公開できるかに関心を持って試行錯誤しています。皆さんのお知恵をお借りできれば幸いです。

展示づくりの裏側

「式年神幸祭記念 香取神宮展」

～展示の裏側ちょっとお見せします～

資料管理課 中川 由莉

皆さん、香取市にある香取神宮にいらっしゃったことはありますか？私は、赤い鳥居と本殿へ続く上り坂、両脇に並ぶ石灯籠が思い浮かんできますが、いかがですか。

では、お祭りはいかがでしょうか。香取神宮では、さまざまな祭礼が行われています。今回取り上げるのは、毎年4月に行われる「神幸祭」です。しかし、今年はひと味違います。「式年神幸祭」といい、なんと12年に1度、午年にだけ行われるお祭りなのです。

「え、どう違うの？」そんな声が聞こえてきそうです。式年神幸祭では、なんと、乗船した香取の神と鹿島の神が、利根川の上、佐原の沖合の牛ヶ鼻うしがはなで出会うのです。12年に1度だけの利根川での祭礼、特別感がありますね。

さて、中央博物館では、記念すべき式年神幸祭にあわせ、トピックス展「式年神幸祭記念 香取神宮展」を開催します。といいましても、祭礼をそのまま持ってくるわけにはいきません。

そこで、展示チームは考えます。香取神宮、式年



写真1 収蔵庫での調査

神幸祭、どのように展示しようか…と。

私たちは、まず収蔵庫へ向かいます。収蔵庫では、絵はがきを調べることにしました。当館では、70,000点余りの絵はがきを収蔵しています。その中に式年神幸祭に関するものはないか調べていきます。

現地にも向かいます。こちらは、津宮に立つ浜鳥居。香取の神が乗った神輿が利根川に浮かぶ御座船ござふねへ乗り込む際にくぐる鳥居です。4月には、利根川に御座船と多くの供奉船ぐぶせんが浮かびます。色彩豊かな船とともに、川で行われる祭礼も大きな見どころです。



写真2 津宮の浜鳥居

こうした調査を繰り返しながら、皆さんに御覧いただく“展示”へと形作っていきます。さて、私たちの調査結果は、どのような形に仕上がるのか!? 展示は、3月14日（土）にスタートします。香取神宮現地での荘厳な祭礼は、素晴らしいものです。この式年神幸祭とともに、当館の展示も、どうぞご期待ください！

博物館資料の紹介

赤絲威大鎧（複製）

大多喜城分館 村田 憲一

本資料は、武藏御嶽神社（東京都青梅市）に所蔵されている国宝の赤絲威鎧（兜、大袖付）を製作当初の姿に想定復元した資料です。復元製作に先立つ調査研究は、3年以上の歳月を要しました。原品は、源平の合戦で功績をあげ、知勇兼備の武将として知られている畠山重忠が奉納したと伝えられ、12世紀ごろの作とされています。平安時代の大鎧は遺作が少なく、同社の赤絲威鎧（兜、大袖付）が関東では唯一のものといわれています。

大鎧は、上級武士が着用する最も格の高い鎧で、平安時代中期ごろに誕生し、改良を加えられながら鎌倉時代まで使用されました。当時は、馬に乗って至近距離で弓を射る騎射戦が主流でしたので、馬上で弓矢を扱うのに適し、また敵の矢から身体を防護するのに適した造りになっています。

当館の複製の大鎧を見ると、まず鎧全体の美しい赤色に目を奪われます。この赤色は、普段私たちが日常生活で目にする赤色とは全く違います。茜染めといって、茜という植物の根を煮出した汁で絹糸を染めています。均一のとれた染具合で、深みと品格を感じさせます。この赤色は、組紐師の古澤祐司氏が平安時代の茜色を出すために非常に苦心をしながら何度も染め直して到達した究極の赤なのです。

赤色だけではなく、札（鎧に使われているたくさんの小さい板）の黒漆、金物の鍍金、文様が染められた絵韋など、当初の美しい姿が今鑑賞できるということは素晴らしいことです。

鎧は、複数の職人の手によって完成します。鍍金された金物類は、白銀師の宮島市郎氏、札の綴じ・漆塗り・威を甲冑師の五反田豊正氏、兜鉢や金具まわり等鉄製部位の製作・最終組み立ては甲冑師の加

藤一胄氏（2代）によって行われ、2年の歳月をかけて平成2年に完成しました。

こうした華やかな意匠を凝らしているのは、神前に奉納するためということもあります。しかしながら、鎧は武士の死装束でもありました。鎧を着て戦い、負けることは死を意味します。鎧着用時には覚悟はあったと思います。鎧を着て死ぬことは、最後まで戦い抜いたという証しで、最期を飾るのにふさわしい死に方という意識もあったのではないかでしょうか。

時代は下りますが、剣豪として知られる宮本武蔵は自分が死んだら鎧を着せて埋葬してほしいと遺言しました。財力のある上級武士であれば、最期を飾るためにも自分なりの贅を尽くすという一面もなかったとは言えないでしょう。

赤絲威大鎧（複製）を前にすると、源平の合戦当時の武将の心意気が感じられます。鎧は武将の晴れ姿、個性を競い合うファッショナアイテムであったといえるでしょう。



赤絲威大鎧（複製）正面（左）、背面（右）

活動紹介

中央博物館のSNS情報発信

企画調整課 園部 華与

中央博物館の“今”を、SNSで発見！

みなさん、中央博物館がSNSで情報を発信していることをご存じでしょうか？

2013年からX（旧ツイッター）での発信をスタートし、今年4月からはInstagramでも、多彩なコンテンツをお届けしています。XとInstagramでは展示のみどころや展示のウラガワをご紹介するほか、Xでは主にイベント情報やお知らせを、Instagramでは研究員の活動や博物館・生態園の四季折々の話題などを発信しています。

12月7日に閉幕しましたトピックス展「利根川の高瀬船」では、数ある展示物の中から高瀬船に搭載されていた夜間に自身の位置を知らせる「航海灯」をご紹介しました。

どんなふうに航海灯が光っていたのかを再現するた



め、展示担当者と協力して、右舷が緑、左舷が赤になるよう、実際に豆電球を入れて灯した様子を投稿しました。

知ってる？中央博物館のデジタルコンテンツ

中央博物館では、公式ホームページのほかにも、生態園での観察がより楽しめる「生態園」の特設ページや、房総の豊かな自然や文化そのものを学べて楽しめる野外博物館「房総のフィールド・ミュージアム」の活動紹介ページ、さらに千葉県内の県立博物館がお届けする「デジタルミュージアム」では、動植物から歴史・文化にいたるまで幅広い分野のコンテンツを公開しています。

ウェブサイトやSNSを通じて、みなさんと博物館をつなぐ架け橋となれるよう、これからも情報を発信していきます！



Instagram



X (旧Twitter)

編集後記 再刊3号目、令和7年度に予定していた『中央博物館だより』をすべて刊行できました。毎号何を載せようか編集委員会で話し合い“中の人”的活動をお届けする紙面を作ってきました。博物館をより身近に感じていただけたら嬉しいです。

中央博物館だより No.76 令和8年2月発行

編集・発行 | 千葉県立中央博物館

本 館	〒260-8682	千葉市中央区青葉町 955-2	TEL 043-265-3111	FAX 043-266-2481
分館海の博物館	〒299-5242	勝浦市吉尾 123	TEL 0470-76-1133	FAX 0470-76-1821
大 利 根 分 館	〒287-0816	香取市佐原ハ 4500	TEL 0478-56-0101	FAX 0478-56-1456
大多喜城分館	〒298-0216	夷隅郡大多喜町大多喜 481	TEL 0470-82-3007	FAX 0470-82-4959

<https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/>

